

## 地球温暖化への疑念は晴れるのか

荒野詰也

現在地球上では人類の活動の影響で、地球温暖化ガスが大気中に堆積し、地球が太陽からのエネルギーと地球からの放散エネルギーのバランスが崩れ、年々地球の温度が上昇している。

このまま、温度上昇が進めば、地球上の生物に支障がでるから、対策が必要であるというのが、一般の人の受け取り方である。しかし、この温度上昇を食い止めるためには、人間の生活方法に何らかの制約が必要になるため、なかなか納得が得られず、各国で意見が対立し地球温暖化そのものと、その原因について異論が出ている。

この議論は、一九九〇年の国連の気候変動枠組条約当初から世界共通の問題として議論されている。それ以後、この地球温暖化問題は、かなりくすぶっている。ところが、この疑念に対して、今般大きな出来事が二つ重なって起こり、この疑念の行方に大きく影響している。

一つは、国連の科学者が、数年おきに出している報告書(IPCC)が今年第六次報告書で「人間活動が地球温暖化を引き起こしていることは疑う余地がない」と初めて断定した。今までの報告書は一九九〇年の第一次報告書(人間活動が気温上昇に関係があるらしい)から、二〇〇七年の第四次報告書では「両社の関係性は非常に高い」、そして二〇一三年第五次報告書では「両者の関連性は極めて高い」とし、そして今回の第六次報告書では断定である。

二つ目は、真鍋淑郎博士のノーベル物理学賞受賞である。

博士の受賞テーマは、確度の高い地球温暖化予測の為の大気海洋結合モデルであり、この温暖化予測の研究は、一九六〇年ごろからであり、国連の気候変動枠組条約よりずっと以前からのものである。「大気中の二酸化炭素が増えると地球温暖化が進むことを定量的に予測する」ことであり、現在の地球温暖化の研究の基盤そのものである。従って、一部の温暖化に抱いている疑念がノーベル賞受賞という、科学的な正当性で縮減されたことになろう。